

看護学生が家族の一員として考える配偶者を失った 高齢女性に対する関わり

高 橋 萌 絵 ・ 齋 藤 美 華

山形県立保健医療大学

看護学生が家族の一員として考える配偶者を失った 高齢女性に対する関わり

高橋 萌 絵¹⁾・齋藤 美 華²⁾

Nursing students' perception of involvement with an elderly woman who lost a family member her spouse

Moe Takahashi¹⁾, Mika Saito²⁾

Abstract

This study was designed to clarify nursing students' ideas of their involvement as a family member while considering the case of an elderly woman who had lost a spouse to unexpected death. After asking 64 fourth-year students majoring in nursing at A University to describe their involvement with the elderly woman, assuming the woman as a family member, we also asked for descriptions of the reasons underlying their involvement. Then we analyzed the responses qualitatively.

Students described their involvement in [stand by one's side and watch over], [accept her as she is], [support and encourage her acceptance of her husband's death], and [psychosocially supporting the reconstruction of life]. As reasons, [physical and psychological effects concerned], [must show empathy], [must enable her to live positively in the future], [need to respond according to the grief stage], and [assumed from the standpoint of a wife or supporter] were extracted.

The results suggest that the students had a perspective on engaging with the elderly woman based on her feelings and stages of grief and assessing her life overall. Education that supports students' thinking and which raises awareness is necessary.

Key words : elderly woman, involvement, nursing students, spouse, unexpected death

I. 緒 言

現在わが国は超高齢多死社会を迎えており、今後もその傾向が見込まれている^{1,2)}。高齢者の死因となった疾病をみると、心疾患などの疾病の急激な発症によるものが、「がん」に次いで多く、予期せぬ死を遂げる人の数は少なくない。家族との死別は、悲嘆反応として心身に影響を与える。

特に、突然に家族の死を経験した遺族は、複雑な悲嘆の経過をたどる可能性が示されている³⁾。死の突然性、つまり予期の無さは死別反応に影響する一因であり⁴⁾、高齢者においては突然の死別が強い反応を示している⁵⁾ことが報告されている。一方、高齢者の看取りにおいては、既婚率の高さと平均寿命の延長および死別後の再婚率の低さなどから、配偶者との死別問題が高齢女性の問題と

1) 東北大学病院
〒980-8575 仙台市青葉区星陵町 1-1
Tohoku University Hospital
1-1 Seiryomachi, Aoba-ku, Sendai, 980-8575, Japan

2) 山形県立保健医療大学 保健医療学部看護学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Nursing,
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, Yamagata, 990-2212, Japan

(受付日 2022. 11. 8, 受理日 2023. 1. 27)

表 1 配偶者を失った高齢女性の事例の内容

<p>・Aさん 70代女性 夫と息子家族の5人暮らし(3世代同居)。</p> <p>・夫 80歳 既往歴なし。会社を経営し、現在も仕事を続けていた。</p> <p>夫は前日から労作時に息苦しさや倦怠感を感じていたが、気にせずその日も仕事をして、Aさんと二人で晩酌をしながら夕食を摂り就寝。夜、突然強い胸痛や息苦しさが出現し、救急搬送された。病院到着後8時間人工呼吸器を装着していたが、その後、急性心筋梗塞にて世界。救急搬送前の「俺はもうダメかもしれない…」という言葉が夫の最後の言葉となった。</p> <p>Aさんは、夫の死後、不眠や食欲低下、体重減少などの身体症状が現れ、意欲が低下し、「何もかも面倒くさい。何もしたくない、誰とも会いたくない。」と言って家にこもるようになった。表情も無くなり、時折「死んでしまいたい、消えてしまいたい。」という発言も見られるようになった。夫については、「突然コロッと逝くなんて爺ちゃんらしいな。」「最後に二人で晩酌しながらご飯が食べられて良かった。」と死を受け入れるような発言を見せる反面、「もっと早く病院に連れて行けばよかった。」「前から爺ちゃんはコロッと逝きたいって言っていたけど、爺ちゃんの介護くらい良かった。」と後悔する言葉や「突然亡くなったから、遺言もないし会社を今後どうしたらいいのかわからない、困った…」と今後への不安も見られた。</p>
--

して取り上げられている⁶⁾。高齢者にとって配偶者の喪失は人生最大の悲しみである。とりわけ、予備力が低下している高齢者は悲嘆に身体的な不調が加わるとうつ状態に陥る危険性が高いことから、配偶者を失った家族への支援が必要である⁷⁾。このことから、配偶者を突然失った高齢女性に対する遺族ケアに取り組むとともに、将来の看護職者の役割を担う看護学生への教育も含めた検討が求められる。

医療機関における死亡の割合は8割を超える。しかしながら、医療現場における遺族ケアは、緩和ケアの現場では取り組まれているが、一般病棟においては必要性を認識するものの十分に時間を割けない現状がある⁸⁾。さらに、国内での遺族ケアの実施率は低く、死亡帰宅後までの支援は実施できていない現状が報告されている⁹⁾。そのため、高齢者の死亡によって看護職者と高齢者の家族との関係は途切れてしまう。また、老年看護学教育においては、終末期の高齢者へのケアや看取りケアについては扱われているが、看取りを終えた遺族に対するケアについて学ぶ機会は少なく、その方法は授業による学習となっている。さらに、高齢者とその家族の実践知を育むうえで重要となる臨地実習は、今日のCOVID-19の影響により家族の面会制限が行われているため、看護学生が実習において家族と接触する機会は少ない。加えて、看護学生を対象とした遺族ケアに関する研究は見当たらない。

こうした状況を踏まえ、看護専門科目である講義および各領域別実習を終えた段階にある看護学生が対象をどのように捉えどどのような関わりを考えているのか、遺族ケアに関する認識についてその到達度を明らかにし、今後の高齢者看護の教育方法を検討することが必要であると考えた。看護学生は遺族に対するケアの実践について経験が十分ではないため対象者の実際をイメージするのは困難である。また、看護職者として考えるより、家族としての立場で考えることにより親近感が高まり関わりを想像し、率直な思いを表出しやすいと考える。そこで、予期せぬ死により配偶者を突然失った高齢女性の事例を看護学生に提示し、対象への関わりを家族の一員としての立場で考えて記述してもらうこととした。

本研究では、予期せぬ死により配偶者を突然失った高齢女性の事例に対して、看護学生が家族の一員として考える関わりとその理由について明らかにし、今後の遺族ケアの教育方法に関する示唆を得ることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象及び方法

対象者は、A大学看護学科4年次学生64人である。看護専門科目である講義および各領域の実習すべてを終了し、総合看護学実習のみを控えている状況である。

表2 対象者の基本属性

		N =64 人 (%)
死別体験の有無	有	48(75.0)
	無	16(25.0)
実習において受持ち患者を突然亡くした経験	有	3(4.7)
	無	43(67.2)
	経験はないが、他学生から話を聞いたことはある	18(28.1)
身内を突然亡くした経験	有	14(21.9)
	無	43(67.2)
	自分の家族ではないが、話を聞いたことはある	7(10.9)
祖父母との同居の有無	同居している	20(31.3)
	同居していない	44(68.8)

方法は、無記名自記式質問紙調査を行った。

2. 調査内容

1) 基本属性

対象者の基本属性として、祖父母との同居の有無および死別体験の有無について尋ねた。また、実習において受持ち患者を突然亡くした経験について、「あり」「なし」「経験はないが、他学生から話を聞いたことはある」で回答を求めた。さらに、身内を突然亡くした経験について、「あり」「なし」「自分の家族ではないが、話を聞いたことはある」で回答を求めた。

2) 看護学生が家族の一員として考える高齢女性への関わり

予期せぬ死により配偶者を失った高齢女性である A さんの事例を表 1 に示した。事例は、臨場感のある実際の事例の方がイメージ化しやすいと考え、筆者が家族の一員である孫の立場で体験した内容を基に作成した。

対象者には、筆者が作成した事例であることを口頭で伝え、紙面で事例を提示し、表 1 の事例を読み、「もし、自分が事例内の A さん一家の家族だったら家族として A さんに対して、①どのような声かけや関わりを行うか、②その理由は何か」の 2 点の質問に自由記述で回答を求めた。なお、家族としてどの立場で回答を行うかの明確な指示は与えず、あくまでも家族の一員としての考えを求めた。

3. 分析方法

記載してもらった「どのような関わりを行うか」と「その理由」についてそれぞれの記述内容を精読し、内容の意味を損なわないように注意しながらコード化した。さらに、類似のコードを分類・整理し、カテゴリー化を行った。

4. 倫理的配慮

研究の趣旨と質問紙への記入方法を文章と口頭で説明して質問紙を配布し、回収は別の場所に設けた回収箱への投函によって行った。研究の協力は自由意志として、協力の可否による成績評価などの影響や不利益はないこと、調査から得られたデータおよび結果は調査者以外が目を通すことはないこと、本研究以外には使用することはないこと、個人情報保護することなどの倫理的配慮について口頭と文書で説明し、質問紙への回答および回収ボックスへの投函をしてもらい同意を得た。なお、回収期間は 1 週間とした。

なお、本研究は山形県立保健医療大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 2204 - 01 - 01）。

III. 結 果

1. 対象者の基本属性

対象者 64 人から回答が得られた（回収率：100%）。対象者の基本属性は表 2 のとおりである。死別体験の有無については、「あり」が 48 人

(75.0%)、「なし」が 16 人 (25.0%) であった。実習において受持ち患者を突然亡くした経験については、「あり」が 3 人 (4.7%)、「なし」が 43 人 (67.2%)、「経験はないが、他学生から話を聞いたことはある」が 18 人 (28.1%) であった。身内を突然亡くした経験については、「あり」が 14 人 (21.9%)、「なし」が 43 人 (67.2%)、「自分の家族ではないが、話を聞いたことはある」が 7 人 (10.9%) であった。祖父母との同居の有無については、「同居している」が 20 人 (31.3%)、「同居していない」が 44 人 (68.8%) であった。

2. 看護学生が家族の一員として考える高齢女性への関わりとその理由

看護学生が家族の一員として考える高齢女性に対する関わりとして、【側に寄り添い見守る】【ありのままを受け入れる】【夫の死の受け入れを支援します】【今後の生活を見据えた体制を整える】の 4 つのカテゴリーが抽出された。また、その理由として【心身への影響が危惧される】【気持ちに寄り添うことが必要である】【前向きに生きられるようにすることが必要である】【悲嘆の段階に応じた対応が必要である】【当事者の立場から必要な支援である】の 5 のカテゴリーが抽出された。

以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉、代表的なコードを [] で示す。

1) 看護学生が家族の一員として考える高齢女性への関わり (表 3)

(1) 【側に寄り添い見守る】

このカテゴリーは、4 つのサブカテゴリーで構成された。[夫の死を前向きに考えられるようになるまで側にいる]などの〈側に寄り添う〉や、[[心が落ち着くまで何もしなくていいからゆっくり休むといいよ。]と声がけする]などの〈ゆっくり休息がとれるようにする〉が含まれた。また、[何もなかったかのうように振る舞う]など〈普段通り振る舞う〉、[話を聞いたり、1 人の時間を作ったり様子に合わせた関わり方をする]などの〈A さんの様子に合わせた関わりを行う〉が含まれた。

(2) 【ありのままを受け入れる】

このカテゴリーは、5 つのサブカテゴリーで構成された。A さんの [死を受け入れるような発言も後悔する発言も受け入れる] などの〈すべての発言や思いを受け入れる〉や、A さんの [発言に

対し、頷きや共感的な態度で関わる]などの〈思いに共感する〉、[A さんが何か話したいと思った時には、じっくりとその話に耳を傾ける]などの〈話を傾聴する〉、[[お辛いんですね。会社のことが不安なのですね。]と A さんの話していることを繰り返す]などの〈言葉を繰り返す〉が含まれた。また、[不安が吐露できる環境づくりを行う]などの〈不安を吐露できる場を設ける〉が含まれた。

(3) 【夫の死の受け入れを支援します】

このカテゴリーは、7 つのサブカテゴリーで構成された。[自分だけを責めないでと声をかける]など〈夫の死が A さんのせいではないことを伝える〉や、[夫の死を受け入れるような発言を肯定する]など〈夫への発言や行動を肯定する〉、[[A さんの夫はいい人生だったと思うよ。]と語りかける]など〈夫が悔いのない最期であったことを伝える〉が含まれた。また、[どんなことを夫にしてあげたかったのか A さんに尋ね、本心を表出してもらおう]などの〈夫への思いを表出してもらおう〉や、[[夫は A さんと最期まで一緒にいられて幸せだったと思う。]と声がけする]などの〈夫にとって A さんと過ごせた人生が幸福であったことを伝える〉が含まれた。さらに、[夫と過ごした楽しかった思い出を一緒に話す]などの〈夫との思い出を一緒に振り返る〉、[[夫の分まで頑張っ生きてよう。]と励ます]などの〈夫の死を意味づけ励ます〉が含まれた。

(4) 【今後の生活を見据えた体制を整える】

このカテゴリーは、5 つのサブカテゴリーで構成された。A さんを [外へ連れ出すなど気分転換になりそうな活動を促す]などの〈気分転換に外出を促す〉、[家事を手伝う]などの〈生活を支援する〉、[気持ちが落ち着いてきたら今後会社をどうしていくか具体的に話を進める]などの〈会社の今後について一緒に考える〉が含まれた。また、[カウンセラーなどの受診を勧める]などの〈専門職に繋げる〉、[[突然のことだから、1 人では大変だし他の家族も今後色々手伝うよ。]と声がけする]など〈家族としていつでもサポートすることを伝える〉が含まれた。

2) 看護学生が家族の一員として考える高齢女性への関わり理由 (表 4)

(1) 【心身への影響が危惧される】

このカテゴリーは、2 つのサブカテゴリーで構

表3 看護学生が家族の一員として考える高齢女性への関わり

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例
側に寄り添い見守る	側に寄り添う	・出来るだけAさんの側にいる ・夫の死を前向きに考えられるようになるまで側にいる
	ゆっくり休息がとれるようにする	・「心が落ち着くまで何もなくていいからゆっくり休むといいよ。」と声がける ・「落ち着くまでは何もなくていいよ、私がするからね。」と声がける
	普段通り振る舞う	・何もなかったかのように振る舞う ・明るく振る舞う
	Aさんの様子に合わせた関わりを行う	・無理に立ち直ってもらおうと考えず、話を聞いてほしい様子の際に傾聴する ・話を聞いたり、1人の時間を作ったり様子に合わせた関わり方をする
ありのままを受け入れる	すべての発言や思いを受け入れる	・後悔や不安を受け止め「そうなんですな。」「〇〇と思っているんですね。」 ・死を受け入れるような発言も後悔する発言も受け入れる
	思いに共感する	・「そう思うんだね。突然だったからね。」と共感的態度で接する ・発言に対し、顔色や共感的な態度で関わる
	話を傾聴する	・Aさんが何か話したいと思ったときには、じっくりとその話に耳を傾ける ・多く話しかけることはせず、Aさんからの話だけに耳を傾けようとする
	言葉を繰り返す	・「最後に二人で食事されたんですね。(Aさんの夫)らしい逝き方ですね。」とAさんが肯定していることをオウム返りする ・「お辛いですね。会社のことが不安なのですね。」とAさんの話していることを繰り返す
	不安を吐露できる場を設ける	・不安が吐露できる環境づくりを行う ・頻回に会いに行きコミュニケーションをとる
夫の死の受け入れを支援します	夫の死がAさんのせいではないことを伝える	・自分だけを責めないでと声をかける ・夫の死がAさんのせいではないことを伝える
	夫への発言や行動を肯定する	・夫の死を受け入れるような発言を肯定する。 ・Aさんが最後まで夫の側にいてくれたことは夫の安心感に繋がったなど、Aさんの行動に対して肯定的な声がけをする
	夫が悔いのない最期であったことを伝える	・「Aさんの夫が望んだ最期になったのではないかな。」と語りかける ・「Aさんの夫は、いい人生だったと思うよ。」と語りかける
	夫への思いを表出してもらう	・夫を失った悲しみや思いを話すことができる機会を設ける ・どんなことを夫にしてあげたかったのかAさんに尋ね、本心を表出してもらう
	夫にとってAさんと過ごせた人生が幸福であったことを伝える	・「夫はAさんと最期まで一緒にいられて幸せだったと思う。」と声がける ・「夫は最期にAさんと一緒にご飯を食べられて良かったと思うよ。」と声がける
	夫との思い出を一緒に振り返る	・夫と過ごした楽しかった思い出を一緒に話す ・夫の思い出話をするこで、死を受け入れられるようにする
	夫の死を意味づけ励ます	・Aさんの話を受け止めつつ、「夫の分まで長生きしようね。どこかで見守ってくれていると思うよ。」といった励ましをする ・「夫の分まで頑張って生きよう。」と励ます
今後の生活を見据えた体制を整える	気分転換に外出を促す	・外に出ることでリフレッシュしてもらえるようにAさんをお花見や遠足などに連れていく ・外へ連れ出すなど気分転換になりそうな活動を促す(お花見やちょっとした散歩とか)
	生活を支援する	・家事を手伝う ・できる限り側にいて生活を支援する
	会社の今後について一緒に考える	・気持ちが落ち着いてきたら今後会社をどうしていくか具体的に話を進める ・「会社もみんなはどうするか考えていこう。」と今後についての話も話し合っていく形にする
	専門職に繋げる	・遺言や会社について問題解決のサポートを行う専門職に繋げる ・カウンセラーなどの受診を勧める
	家族としていつでもサポートすることを伝える	・「これからのことは、私たちも一緒に考えていこうから、一人で抱え込まず、何でも言ってね。」と声がけを行う ・不安を打ち明けられる人は家族の中で自分以外にもいるかを確認し、その人や自分にいつでも話していいのだと伝える ・「突然のことだから、1人では大変だし他の家族も今後色々手伝うよ。」と声がける

成された。[「私はあなたが大切である」ということを伝えることで、自傷の恐れを減少させるため]などの〈自己の存在の否定や自傷の恐れがある〉と、[Aさんまで体調を崩してほしくないため]などの〈体調が心配である〉が含まれた。

(2)【気持ちに寄り添うことが必要である】

このカテゴリーは、5つのサブカテゴリーで構成された。[Aさんの気持ちを分かってあげて、気持ちを理解しようとしている姿勢を見せることが大事だと思ったから]などの〈気持ちを受容す

表 4 看護学生が家族の一員として考える高齢女性への関わりの理由

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例
心身への影響が危惧される	自己の存在の否定や自傷の恐れがある	・自分を責めたり、「死んでしまいたい」という発言があり、Aさんが1人であることでこのような否定的な感情がさらに大きくなると思われるため ・“私はあなたが大切である”ということ伝えることで、自傷の恐れを減少させるため
	体調が心配である	・不眠や食欲低下などが現れており、Aさんの健康状態やADLが低下すると考えられるから ・Aさんまで体調を崩してほしくないため
気持ちに寄り添うことが必要である	気持ちを受容することが大切である	・Aさんの気持ちを分かちあけて、気持ちを理解しようとしている姿勢を見せることが大事だと思ったから ・家族を亡くしてすぐのため、色々話し合うよりもまずは辛さを受け止めることが適切だと感じたから
	気持ちに共感することが大切である	・Aさんの辛い気持ちに共感することが大切だと思ったから ・共感することが必要だと思ったから
	見守っていく必要がある	・見守っていく必要があるため ・何か言っても気持ちが変わることはないと思うため、Aさんの気持ちの整理ができるまで近くで待つことが大切だと思ったから
	気持ちの整理ができるようにしたい	・Aさんは気持ちの整理がついていない状況、かつ希死念慮が見られるため、気持ちを言葉にすることで気持ちの整理を促すため ・誰かに気持ちや思い出を聞いてもらうことは気持ちの整理に繋がり、喪失を少しずつ受容していけると思うから
	気持ちを共有したい	・一番ショックを受けているのはAさんだと思うので、側にいて気持ちを共有したい ・夫の話をすることで一緒に悲しむこともできるのではないかと感じたい
前向きに生きられるようにすることが必要である	同じような思いを持っている人がいると知ってほしい	・Aさんだけがその感情でいるわけでないこと、同じように考えている人もいるということを知ってもらいたい ・同じ思いを共有し、一人じゃないと思ってほしいから
	落ち込んだ気持ちを和らげたい	・夫が幸せに逝けたと聞くことでAさん心も少し軽くなると考えたから ・辛い気持ちに共感しつつ、話の内容からポジティブな話を出して、沈んだ気持ちを和らげたいと思ったから
	1人ではないことを伝えたい	・誰かが近くにいるだけでも孤独感が軽減すると考えるため ・話したいときに話せる人がいる、夫を亡くしたけれどそれでも自分を支えてくれる人がいて孤独ではないことを感じてもらいたいため
	気分転換を促したい	・少しでも活動的になることで、閉じこもりがちな身体・心に気分転換を促すため ・1人で家にもってばかりでは気分が落ちていくばかりだと思うから
	後悔を少なくしたい	・死を受け入れていくためにAさん自身が感じている後悔を少なくしたいから ・後悔が少しでもなくなるように肯定した声かけをする
	今後の生活に希望を持ってほしい	・側にいて話を聞いたり、思い出話をするなどで生きがいをもって生きていけるようなきっかけとしたいから ・今後の生活に少しでも楽しみや希望を持ってほしいから
	専門職に繋げることが必要である	・遺言や会社について困っているが、看護師の職分から外れるため他の専門職に繋げることが必要だと考える ・会社について詳しい人に話せることが必要だと思ったから
	悲嘆の段階に応じた対応が必要である	まだ死を受容できていない段階である
気持ちの整理がついていない時期である		・急に亡くなってしまい理解が追い付かず、頭の中が整理できない状態であると考えたため ・夫を亡くしたばかりで心の整理がついていないと考えられるため
死の受容段階から今後への移行期間である		・今は体験を受け止める時期からこれから考える時期への移行期間だと思ったから
突然死直後である		・突然死直後は意見を言っても耳に入らないと思うため
当事者の立場から必要な支援である	当事者の立場になった時に欲しい支援である	・自分が同じような状況に陥った時に、ただ話すようなことはせず側にいてほしいと思ったから ・まだ、自分も夫の死を受け入れられていないと思うから、無理にポジティブなことを言葉にすると思うから ・自分自身もあまり考えたくないの、何もなかったかのようにしてしまうと思うから

ることが大切である) や、[共感することが必要だと思ったから] などの〈気持ちに共感することが大切である〉、[見守っていく必要があるため] などの〈見守っていく必要がある〉、[誰かに気持ちや思い出を聞いてもらうことは気持ちの整理に

繋がり、喪失を少しずつ受容していけると思うから] などの〈気持ちの整理ができるようにしたい〉、[一番ショックを受けているのは A さんだと思うので、側にいて気持ちを共有したい] などの〈気持ちを共有したい〉が含まれた。

(3) 【前向きに生きられるようにすることが必要である】

このカテゴリーは、7つのサブカテゴリーで構成された。[同じ思いを共有し、一人じゃないと思ってほしいから]などの〈同じ思いを持っている人がいることを知ってほしい〉や、[夫が幸せに逝けたと聞くことでAさんも心が少し軽くなると考えたから]などの〈落ち込んだ気持ちを和らげたい〉、[誰かが近くにいるだけでも孤独感が軽減すると考えるため]などの〈1人でないことを伝えたい〉、[少しでも活動的になることで、閉じこもりがちな身体・心に気分転換を促すため]などの〈気分転換を促したい〉、[死を受け入れていくためにAさん自身が感じている後悔を少なくしたいから]などの〈後悔を少なくしたい〉、[今後の生活に少しでも楽しみや希望を持ってほしいから]などの〈今後の生活に希望を持ってほしい〉、[会社について詳しい人に話せることが必要だと思ったから]などの〈専門職に繋げることが必要である〉が含まれた。

(4) 【悲嘆の段階に応じた対応が必要である】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリーで構成された。[夫の死を受容する時間が必要だと思ったから]などの〈まだ死を受容できていない段階である〉や、[夫を亡くしたばかりで心の整理がついてないと考えられるため]などの〈気持ちの整理がついていない時期である〉、[今は体験を受け止める時期からこれからを考える時期への移行期間だと思ったから]などの〈死の受容段階から今後への移行期間である〉から、[突然死直後は意見を言っても耳に入らないと思うため]などの〈突然死直後である〉が含まれた。

(5) 【当事者の立場から必要な支援である】

このカテゴリーには、[自分が同じような状況に陥った時に、ただ話すようなことはせず側にいてほしいと思ったから]などの〈当事者の立場になった時に欲しい支援である〉が含まれた。

IV. 考 察

1. 看護学生が家族の一員として考える予期せぬ死により配偶者を失った高齢女性への関わり

本研究において看護学生は、予期せぬ死により配偶者を突然失った高齢女性に対して【側に寄り

添い見守る】【ありのままを受け入れる】【夫の死の受け入れを支援します】【今後の生活を見据えた体制を整える】関わりを考えていた。小島ら¹⁰⁾は悲嘆への対応として、「衝撃の段階」では、温かい誠実な思いやりのある態度で側に付き添い、静かに見守ること、「防衛的退行の段階」では、遺族をありのまま受け入れ、受容・共感的態度で関わること、「承認の段階」では、誠実な支持と力強い励ましを行うこと、「適応の段階」では、社会的資源を提供することが必要であると述べている。このことから、看護学生は配偶者を亡くした高齢女性の悲嘆の段階を意識した関わりを行っていたといえる。さらに、小島ら⁷⁾の悲嘆への対応と照らし合わせると、【側に寄り添い見守る】は「衝撃の段階」に、【ありのままを受け入れる】は「防衛的退行の段階」に、【夫の死の受け入れを支援します】は「承認の段階」に、【今後の生活を見据えた体制を整える】は「適応の段階」に対応している。そのことから、看護学生は、高齢女性の悲嘆を危機モデルの各段階に合わせて捉えた関わりを考えていたことが推測される。

家族の悲嘆ケアは、情緒的介入、情動的介入、道具的介入、治療的介入の4分類で構成されている⁸⁾。本研究では、〈生活を支援する〉、〈会社の今後について一緒に考える〉、〈専門職に繋げる〉、〈家族としていつでもサポートすることを伝える〉は道具的介入に該当し、〈専門職に繋げる〉の[カウンセラーなどの受診を勧める]は治療的介入に該当し、その他のサブカテゴリーは全て情緒的介入に該当すると考えられる。このように、看護学生が考える関わりは、情緒的介入が多くを占めていることから、看護学生は高齢女性の気持ちに着目した関わりを重視していることが伺える。小島ら¹⁰⁾は、配偶者との死別にあたって感じたストレスについて、遺族の約6割が「死別後の雑事(死別後の手続きや行事)」に、3割以上が「経済的問題」、「日常生活の困難(家事や近所づきあいなど)」、「周囲との人間関係」に困難を感じていることを示している。本研究においても【今後の生活を見据えた体制を整える】が見られたことから、看護学生は遺族の生活に着目した関わりを考えていることが伺える。このように、情緒面だけでなく、遺族が生活していく上で乗り越えなければならない現実的な生活上の課題への援助につい

て必要性を認識していたと考える。

遺族と接する時の基本姿勢として、感情表出を促すことと共感を持って傾聴し、遺族をありのままに受け止めることが挙げられている¹²⁾。本研究結果からも【ありのままを受け入れる】ために、〈すべての発言や思いを受け入れる〉〈思いに共感する〉〈話を傾聴する〉〈言葉を繰り返す〉〈不安を吐露できる場を設ける〉関わりが見出されたことから、看護学生は、遺族の感情表出を促すことと共感を持って傾聴すること、さらに、遺族をありのままに受け止めることを重視していることが考えられる。受容・共感・言葉の繰り返しは傾聴の技術であり、看護学生にとっては基本的なコミュニケーション技法である。また、【側に寄り添い見守る】【ありのままを受け入れる】ために、〈側に寄り添う〉〈普段通り振る舞う〉〈Aさんの様子に合わせた関わりを行う〉など環境に注目した関わり方や〈不安を吐露できる場を設ける〉など感情表出のきっかけを作る関わり方、〈ゆっくり休息がとれるようにする〉など時間に注目した関わり方などを考えていた。このことから、看護学生は家族の一員として高齢女性が自己整理作業を行える関わりに重きを置いていたことが伺える。

2. 看護学生が家族の一員として考える予期せぬ死により配偶者を失った高齢女性への関わり理由

看護学生が家族の一員であると想定した場合の高齢女性に対する関わり理由として【心身への影響が危惧される】【気持ちに寄り添うことが必要である】【前向きに生きられるようにすることが必要である】【悲嘆の段階に応じた対応が必要である】【当事者の立場から必要な支援である】が見出された。このことから、看護学生は高齢女性の心身の影響を考えるとともに家族を取り巻く環境や生活を含め家族全体をアセスメントするという既存の学習に基づいて考えていたことが予測できる。

高齢者の看取りを終えた家族への悲嘆の援助として、この時期の家族には支えるということではなく、遺族の悲しみに共に寄り添うことが大切であることが示されている¹³⁾。【気持ちに寄り添うことが必要である】の理由から、看護学生はその必要性を認識していたと考える。また、【当事者の立場から必要な支援である】のように看護学生は自分が同じ立場に陥ったことを想定して考えて

いた。対象者の半数以上が死別体験をしており、この体験が他者の死に対する痛みや悲しみを理解する想像力や共感性を育み、他人の体験を自分の身に置き換えて考えていると思われる。

3. 今後の高齢者の悲嘆ケアにおける看護教育への示唆

本研究では、予期せぬ死により配偶者を亡くした高齢女性に対する関わりについて、看護職者としての視点ではなく、家族の一員であると想定して考えてもらった。看護学生には家族としてどの立場で回答を行うかの明確な指示は与えていないが、孫の立場で体験した事例内容であることを伝えているため、孫としての立場で高齢女性への関わりを想定していたものが多い可能性がある。そのため、看護職者としての視点であればどうだったか、その比較検討はできないが、看護学生は情緒面だけでなく、今後の生活を見据えた体制を整えるための具体的かつ多様な関わりを考えていることが見出された。看護学生は、家族の一員であると想定することで、遺族である対象者の気持ちを的確に捉え、関わりを想像しやすいことが伺える。また、本研究の対象である看護学生は、看護専門科目である講義および各領域の実習すべてを終了していた。そのことから、対象者への生活者としての理解と関わりへの基本的な姿勢が育まれていたと考える。ただし、本研究は、実際の高齢者家族を対象とした関わりを査定した研究ではないため、看護学生の実践能力の可否については判断できない。これらについては、今後検証が必要であると考えられる。

本研究結果から、遺族ケア教育において、看護学生が対象の立場で気持ちを考え、悲嘆の段階を踏まえた関わりを行う視点や生活を含めた家族全体をアセスメントする視点を支持し、意識づけていくことが重要であると考えられる。

4. 本研究の限界と課題

本研究は、1 教育機関の看護学生を対象としていることに加え、独自に作成した事例を用いての看護学生の考えであるという限界がある。また、家族の一員であることを想定した関わりについて考えてもらっているため、看護学生が看護職者として必要であると認識している関わりが全て表出

されているとはいえない。しかしながら、看護学生が遺族である対象者の気持ちを捉え、関わりを想像できていたという本研究結果を考慮すると、家族の立場でどのように考えるかという想定と事例提示そのものも遺族ケアをイメージしてもらう教育方法の1つであった可能性がある。今日のCOVID-19の影響により看護学生が家族と接触する機会が少ないという状況を鑑みると、このような方法を授業に導入する工夫が必要であると考え。今後は、教育方法に導入した際の学習の成果を検証するとともに、様々な状況にある遺族について検討していく予定である。

V. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力くださいました学生の皆様に心より感謝いたします。

本稿は、山形県立保健医療大学の2021年度卒業研究論文を一部加筆修正したものである。

VI. 利益相反

本稿について他者との利益相反はない。

【文 献】

- 1) 内閣府: 令和2年版高齢社会白書—高齢化の現状と将来像. 2021年7月1日閲覧
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/s1_1_1.html
- 2) 厚生労働省: 多死社会の到来. 2021年3月27日閲覧
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000138746.pdf>
- 3) 武富 由美子, 田淵 康子, 熊谷 有記, 坂本 麻衣子, 鐘ヶ江 寿美子, 矢ヶ部 伸也, 山本 洋子: 在宅でがん患者を亡くした遺族の心的外傷後成長と関連要因. 死の臨床, 2020;43 (1);193-198.
- 4) 宮林 幸江, 安田 仁: 死因の相違が遺族の健康・抑うつ・悲嘆反応に及ぼす影響. 日本公衆衛生雑誌, 2008;55 (3);139-146.
- 5) 澤田 愛子: 農村社会における死別高齢者の悲嘆と回復. 死の臨床, 1997;20 (1);43-47.
- 6) 寺崎 明美, 小原 泉, 山子 輝子, 間瀬 由記, 林 洋一: 高齢女性の配偶者死別における悲嘆と影響要因. 老年精神医学雑誌, 1999;10(2);167-180.
- 7) 北川公子: エンドオブライフケアの実際 看取りを終えた家族への援助, 亀井智子, 小玉敏江編著, 高齢者看護学 (第3版). 東京: 中央法規出版; 2018. 339-341.
- 8) 本島 昭洋: 【「ありふれた(ような)症例」から「学べた」こと】死別と関連した症例の検討. 臨床精神医学, 2015;44 (9);1169-1177.
- 9) 二宮千春, 中野美保子: 救急外来で予期せぬ死を遂げた患者の遺族が抱く医療者へのニーズ. 2021;483-491.
- 10) 小島操子, 佐藤禮子: 危機状況にある患者・家族の危機の分析と看護介入 フィンク/コーン/アグィレラ/ムース/家族の危機モデルより. 東京: 金芳堂; 2017.3-5.
- 11) 宮林幸江, 関本昭治: はじめて学ぶグリーフケア. 日本看護協会出版会, 東京, 2012.
- 12) 立野 淳子, 山勢 博彰, 山勢 善江: 国内外における遺族研究の動向と今後の課題. 日本看護研究学会雑誌, 2011;34 (1);161-170.
- 13) 川上千春: 高齢者の終末期における看護 家族へのグリーフケア, 亀井智子編著, 老年看護学概論/老年保健 (第5版). 東京: メヂカルフレンド; 2020. 164-176.

要 旨

予期せぬ死により配偶者を失った高齢女性の事例に対して、看護学生が家族の一員として考える関わりとその理由を明らかにすることを目的とした。

A 大学看護学科 4 年次学生 64 人に対して、独自に作成した事例について、家族の一員であることを想定しての高齢女性への関わりとその理由について記述してもらい、質的に分析した。

看護学生は、【側に寄り添い見守る】【ありのままを受け入れる】【夫の死の受け入れを支援します】【今後の生活を見据えた体制を整える】関わりを考慮しており、その理由として、【心身への影響が危惧される】【気持ちに寄り添うことが必要である】【前向きに生きられるようにすることが必要である】【悲嘆の段階に応じた対応が必要である】【当事者の立場から必要な支援である】が抽出された。

看護学生の高齢女性の気持ちや悲嘆の段階を踏まえた関わりを行う視点や生活全体をアセスメントする視点を支持し、意識づける遺族ケア教育の必要性が示唆された。

キーワード：高齢女性、関わり、看護学生、配偶者、予期せぬ死